

森の文化としてのヨーロッパ

嶋田 義仁*

L'Europe comme le monde de la culture sylvestre

SHIMADA Yoshihito

L'Europe est un monde de la culture sylvestre comme l'Asie de mousson. Le continent afro-eurasien étant occupé au centre par une vaste région aride et sèche du Sahara jusqu'au Gobi, les régions humides et forestières sont limités aux franges du continent. Nombreux contes populaires, romans, poèmes européennes ne sont pas compréhensive sans tenir compte de cette situation sylvestre. Même la notion fameuse de l'état de nature par J.-J. Rousseau présuppose l'existence des forêts riches où les hommes primitives pouvaient vivre en état de liberté et égalité.

Se formant des arbres à feuilles caduques comme chênes, le monde sylvestre européen était riche en animaux et en graines à la fois. Il était également libre des insectes et parasites dangereuse comme mouche Tsé Tsé, qui contaminent la forêt tropicale. Dans la forêt européenne l'élevage des moutons, chèvres, vaches et cheveaux, mais surtout celui des cochons a été donc possible. Ceci a suscité pourtant avec la construction des navires un épuisement rapide de la forêt européenne beaucoup plus tôt que les forêts de l'Asie. Prenant l'expression d'un œuvre de G. Condominus les européens ont mangé leurs forêts. Ainsi déjà au 16^e siècle leur frontière vierge s'est perdue à l'intérieur de l'Europe. Nous considérons que c' était une raison principale par laquelle les européens se sont lancés en Océan à la recherche de leur frontière.

キーワード

森、民話、自然状態、落葉樹、オーク、世界進出

はじめに

ヨーロッパの基層文化をわたしは森の文化だと考えている。

図1を見ていただきたい。アフロ・ユーラシア大陸の降雨量図である。真っ白な部分は年間降雨量 500mm 以下の乾燥地域。灰色部分は年間降雨量 500mm から 1000mm の半乾燥地域。黒い部分は年間降雨量が 1000mm 以上の湿潤地域である。世界の気候図にはケッペンの気候図のように精密で

*名古屋大学大学院文学研究科教授

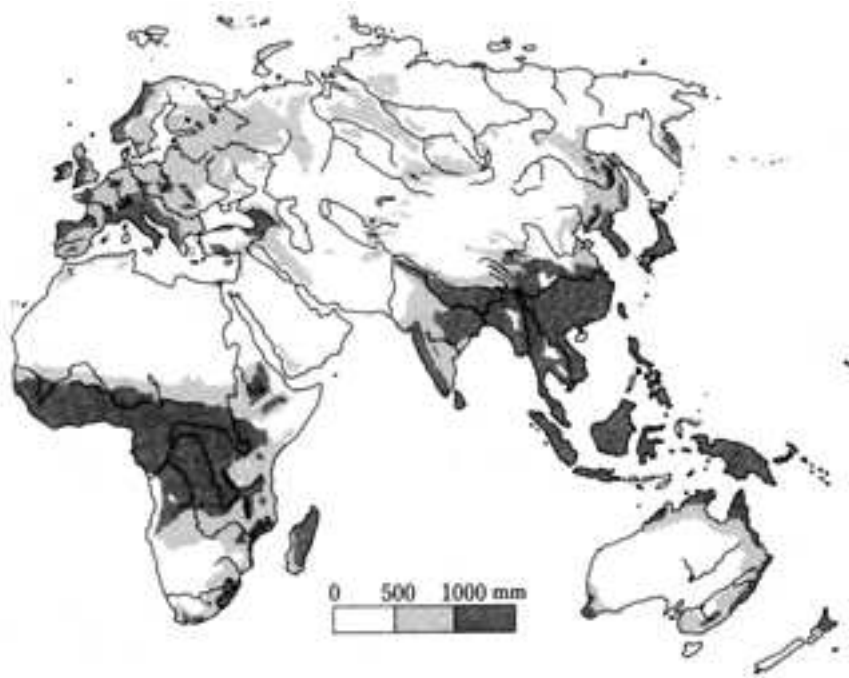


図1 アフロ・ユーラシア大陸気候図

詳細な気候図があるが、複雑な気候図では世界の気候の大勢を把握するのが困難である。そこでおもいきって、年降水量だけで、それも年降水量を3段階にわけただけの気候図を作ってみたのである。

この気候図を作るきっかけは、アフロ・ユーラシア大陸の乾燥地域の分布を知ることだった。わたしは、アフリカのサハラ砂漠南縁のサーヘル・スーダン地域での研究をながらく続けてきた。サーヘル・スーダン地域を例に、世界の乾燥地域の文化を比較しあるいは総合的に捉える作業が必要だった。そこで、図1のような気候図を作ってみたのである。

この図でわかることは、次のような事実である。

①北半球に位置するアフロ・ユーラシア大陸の中央部には広大な乾燥地域が広がっている。年降水量1000mm以上の湿潤地域は、大陸の辺縁部に分布するだけである。

②その大陸辺縁部に位置する日本は、世界的な基準からみれば、最湿潤の、したがって植生的には森林が最も発達した地域に属する。日本で降水量が少ないのは年間降水量が1000mm内外の瀬戸内海地方でこの地方には灌漑の溜池が数多く分布している。しかし年間降水量1000mmというのは世界的基準で見れば相当な多雨地域である。そのうえに、日本には年間2000mm以上、ところによれば4000mmもの降雨がある地域が分布している。この地図では年間降水量2000mm以上の地域を図示していないが、アフリカや東南アジアの熱帯雨林地域でも、2000mm以上の地域は意外と少ない。

日本の文化はしたがって、地球上において特権的ともいえる多雨の森林地域で育まれた文化だと

言える。言い換えるとわれわれは湿潤多雨の森林文化の偏見の中にある。世界を見る時、われわれはこのことに意識的でなければならない。世界には湿潤地域よりも広大な乾燥地域が広がっているからだ。特にアフロ・ユーラシア大陸の中央部には広大な乾燥地域が広がっている。こうした認識から、筆者のこれまでの研究の中心は、湿潤森林文化とは対極にある砂漠や草原のひろがる乾燥地域の歴史や文化をその固有性において理解することと、むしろ乾燥地を中心に人類の歴史を理解することであった（嶋田 2005）。

③そして実は、ヨーロッパも日本と同じように湿潤森林文化に属するのだ、ということが本稿で論じてみたいことなのである。

I. ヨーロッパの森とアジア・モンスーン地域の森

ユーラシア大陸の湿潤地域は、大陸の東南部と北西部にある。日本から東南アジアを経てインドにいたる大陸東南部は、いわゆるアジア・モンスーン地域である。これに対して大陸北西部に分布する湿潤地域は地中海性気候と西岸大西洋気候地域に相当する。ヨーロッパが位置するのは、この大陸北西部湿潤地域である。

図1でわかるように、湿潤地域といっても、ヨーロッパ地域の降雨量は、大陸東南部のモンスーン地域の降雨量より少ない。後者の地域には、年間降雨量 1000mm 以上の地域がかなり広範囲に分布しているが、ヨーロッパの大半は年間降雨量が 1000mm 以下の地域である。ちなみにパリの年間降雨量は 600mm 内外である。

しかし、ヨーロッパ湿潤地域は、アジア・モンスーン地域が熱帯から亜熱帯に分布するのに対して、冷涼な高緯度地帯に分布する。そのため蒸散量はかなり低い。しかも、ヨーロッパ湿潤地域は地中海性気候の影響をかなり受けているので、雨は寒冷な冬季に多い。したがって、蒸散量はかなり少なく、年降雨量が少なくとも、湿潤度はかなり高いから、ヨーロッパは、立派な湿潤森林地域である。

ただこのことをふまえた上で、アジア・モンスーン地域の森林とヨーロッパの森林のちがいははっきり認識しておくべきだろう。アジア・モンスーン地域の森林はヨーロッパより多雨の熱帯・亜熱帯性の森林であり、ヨーロッパの森林は雨の絶対量が少ない亜寒帯性の森林である。

このことより二つの森にはつぎのような違いがでてくる。

- ①ヨーロッパの森はアジア・モンスーン地域の森に比べて密度が薄い。面積も、アジア・モンスーン地域の森より狭い。それ故、開発しやすく、また消滅も早かった。
- ②ヨーロッパの森には落葉樹が多い。アジア・モンスーン地域の森はほとんどが常緑樹であり、それは、照葉樹林文化論で知られるように、日本の中央部、東海地方にまで及んでいた。中部日本から東北日本にかけてはブナ・ナラ、クヌギなどの落葉樹林が分布するが、これはアジア・モンスーン地域の植生としては例外である。しかし、ヨーロッパ中央部の森林を占めるのはブナ・ナラ系の落葉樹林である。そのなかでも、英語でオーク、フランス語でシェンヌと呼ばれる柏系の

森の文化としてのヨーロッパ

樹木が重要である。オークを日本で樫と訳している場合が多いが、日本の樫は常緑樹であり、オークやシェンヌと呼ばれている木はむしろ柏に相当するのではないかと思っている。シェンヌ（以下この語に統一）の葉は、柏餅をまく柏の葉とそっくりである。

II. 民話に見る森の文化

ヨーロッパが森の文化であることを教えてくれるのは、何よりもその民話である。

たとえば、『赤頭巾ちゃん』。赤頭巾は森の中を歩いて森の中に住むおばあちゃんのもとに、お菓子を届けに行く。それをみた狼が先回りしておばあちゃんを食べて、おばあちゃんに扮して赤頭巾をまつ。狼は結局木こりに殺されてしまうのであるが、このようなストーリーは森のなかでの生活があってはじめて可能になる。森の中で一人暮らしをしている老女という設定も、民話のなかだけのはなしかと思ったら、実際フランスの田舎にはそれらしき生活をしているご老人がいてびっくりした。

赤頭巾をたすける木こりというのも、ヨーロッパの民話ではおなじみだ。『金の斧、銀の斧』という木こりを主人公にした民話がよく知られている。正直者の木こりが、斧を泉におとしてしまった。すると泉の神さんがあらわれて、金の斧と銀の斧をもってあらわれ、どれがそなたの斧じゃと問う。正直者の木こりは、いえいえ、わたしの斧は鉄の斧ですと答え、その正直さによって金の斧を与えられる。これをみた別の木こりが、わざと鉄の斧を泉に投げ込み、現われた神さんから嘘について金の斧をせしめようとして、罰せられる、という話である。

『白雪姫』も、継母にいじめられて森の中に捨てられるが、7人の小人の木こりたちに救われる話である。

森は、狼がいたり、泉の神がいたり、妖精のような小人の木こりがいたり、異界の世界である。その森が、城を閉じ込めてしまうというのが、『眠り姫』である。子宝に恵まれない王女様がいた。王女は魔法使いに頼んで無事女兒を得た。そこで、国中の魔女を城に呼びお祝いの宴を催すが、一人の魔女を招待し忘れた。怒った魔女は、その姫は成人したある日に、糸つむぎの針棒に刺されて死ぬという魔法をかける。他の魔女たちがなんとかその魔法を解く術をかけるが、かろうじて死ぬことは免れても長き眠りにはいらざるをえなくなった。王は国中のつむぎ棒を破棄させるが、予言どおり、姫は成人したある日つむぎ棒に刺されて眠りについてしまう。姫ばかりではない。国中が眠りについてしまう。その間、城を囲む森は城をおおい隠してしまう。そして呪いの解けるある日、旅の王子が城の中で眠る姫を見つけ、姫に接吻して、姫は目覚めるという話である。ひとが油断するとすぐ森が生き物のように人の生活空間をおびやかす、そんな生活環境があってはじめてうまれる民話である。

フランスの田園地帯をめぐってこもりした森があれば、なかに必ずといっていいほど城がある。城はわざと森を周囲にめぐらせているかに見えるが、本来は、その周囲の田園も森であったはずである。森の中を開いて城を作ってきたその名残が、今も森の中の城というかたちで残っているのである。

ところで、民話を含めて、イギリス文学からみた森の文化を扱った素敵な著書に川崎俊彦『森のイングランド ロビン・フッドからチャタレー夫人まで』（1987 平凡社）があることを紹介しておこう。著者は名古屋大学文学部の英文学の教授だった人である。小論でも以下何度か、この著書に言及する。

Ⅲ. ヨーロッパ人にとっての「自然状態」

近世ヨーロッパにおいては、人間の本来の自然状態とは何か、という議論が沸きあがった。中世を支配していた神中心のキリスト教世界観にかわり、人間そのものに価値を見出すことから、人間のあるべき姿を探ろうという趨勢がうまれた。そのなかで、人間は本来いかなる状態にあったのか、という議論が高まったのである。この自然状態の考え方には二つの対照的な考え方がある。ひとつはイギリスの哲学者ホブズ（1588-1679）が提唱した「万人の万人に対する闘争」という考え方である。これに対して、ジャンジャック・ルッソーは、『不平等起源論』で、自然状態において人はむしろ平和で、自由で平等な生活を享受していた、と主張した。

ホブズが、自然状態を何ゆえに「万人の万人に対する闘争」状態として捉えたかは、イギリスの歴史を考えてみるとよくわかる。イギリスの歴史は、実に闘争の歴史だったからである。イギリスにかぎらずヨーロッパには紀元前までには、ケルト系民族が分布していたが、カエサルにひいきいられたローマ人の侵略（紀元前 57 年）、ついで北方からはゲルマン民族の侵略（4 世紀）、そしてついでヴァイキング、ノルマン人（9 世紀）の侵略が相次いだ。そのような諸民族衝突の主な舞台となったのは、ゲルマニア、ゴールと呼ばれた現フランスを中心とする地方であるが、イギリスもはげしい民族衝突の舞台となった。しかしフランスの場合、それぞれの侵略が侵略ごとに比較的安定した秩序に至ったが、イギリスの場合、それぞれの侵略が中途半端に終わっている。それ故、イギリスには、ケルト系民族とローマ人の争い、ついでゲルマン系のアングロ・サクソン民族とケルト系民族の争い、そしてさらにこれに 9 世紀頃からはノルマン人の侵略がくわわり、薔薇戦争など、複雑な戦争状態が継続してきた。

イギリスが曲がりなりにも政治的安定を得たのは、ホブズが生まれる 80 年前に現われ、独裁的な強権力をふるったヘンリー八世（在位 1509-47）の時代にすぎない。ヘンリー八世は世継ぎを得るために 6 人の女性と結婚し、離婚するためには妻たちの暗殺や不倫のでっちあげを躊躇せず、ローマ教皇から離婚を拒否されるや、イギリス国教会をでっちあげ、ローマ・カトリックの教会や修道院の大々的破壊をおこなった。その渦中、『ユートピア』の著者トマス・モアも刑死させられている。ヘンリー八世はとんでもないデスポットであった。しかしおかげで政治秩序は安定した。こうした歴史事実を前に、ホブズが「自然状態」を「万人の万人の闘争」状態として捉え、国家の成立とともに「万人の万人の闘争」状態は終わる、と考えたのは無理からぬことであった。

しかしまたこうした「自然状態」とは本来の「自然状態」ではなくすでに社会化した「社会状態」だと、ルッソーが批判したのもまた正しいであろう。しかしここで興味があるのは、ルッソーは何故に「自然状態」を本来は平和で、自由で、平等な生活が営まれた状態と見るに至ったかというこ

森の文化としてのヨーロッパ

とである。その理由を探ってみると、ルッソーは豊かな森の存在を前提に「自然状態」を考えていたことがわかる。

「土地は、その自然のままの豊穡さに放置され、いまだかつて斧を入れられたことのない大森林に蔽われていて、一步ごとにあらゆる種類の動物に食物庫と隠れ場所とを提供する。」(ルッソー、1972 : 42)

自然人はこの豊かな自然に食料も棲家も保障されて、「定まった住居もなく、たがいに相手を必要ともせず、恐らくは一生に一度か二度会うか会わないくらいで、知り合うこともなく、話し合うこともない人々」(ibid. : 58)であった。この豊かな自然の恵みゆえに、人は平和で、自由で平等だったのである。

このヨーロッパの森の豊かさにはわたしも実際驚いた。ブルターニュの例であるが、胡桃やはしばみ(ノワゼット)などの堅果類のほか、さまざまなきのこ、野いちご野ぶどうなどの野生の漿果類が豊富で、これでは、森のものを採集するだけで食っていけないのではないかと、思ったことがある。人間が直接食べるものだけではなく、野生動物や家畜が食べる木の実、つまりどんぐり類がまた豊富なのである。ここで先に述べた落葉樹林の問題がでてくる。同じ森でも、常緑樹林と落葉樹林では、どんぐり類の生産量がまったく異なる。日本では一時照葉樹林文化論が盛んに論じられたが、わが国の採集狩猟文化がさかえたのはむしろ落葉樹帯がひろがる中部山岳地帯から北の東日本である。ヨーロッパ、特にいわゆる西ヨーロッパにはこの落葉樹林帯が広がっている。ドイツあたりになると針葉樹林帯がふえてくる。また地中海気候区では月桂樹、オリーブなどの常緑広葉樹がふえてくるが、西ヨーロッパを中心とするヨーロッパを占めるのは木の実豊富な落葉樹林帯である。

中世の絵画などをみると、この落葉樹林帯にじつに多数の野生動物がいて王侯貴族がさかんに狩猟をしている姿が描かれてる。今も残る貴族の館を訪れるなら、壁に鹿類の剥製がいくつもかけられているのを見ることができただろう。狩猟にかぎらず森の利用は王侯貴族の特権のひとつであった。森では豚など家畜の放牧も盛んにおこなわれた。どんぐり類が家畜の貴重な餌となっていたのである。落葉樹によじ登って木の実を採集して家畜に投げあたえている牧童のすがたなどもある。中世のある文書では、森の大きさを木の実などの豊作年に飼育できる豚の頭数で表現していたという。15世紀のある資料は、ドイツのある森で6000ヘクタールの森で、約二万頭の豚が飼育できたとしている(ハーゼル 1996 : 68)。

落葉樹のなかで、特に重要なのは、オーク(英)、シェンヌ(仏)と呼ばれる柏系の落葉樹である。ケルト民族の宗教ドルイド教の聖者はシェンヌの木になる宿り木を手にした姿で描かれる。今でも、フランスの新年には、シェンヌの木になる宿り木を切って、日本の門松よろしく家の入り口に飾る風習がある。フランス中世に現われて聖王と称されたルイ9世は、シェンヌの木の下で政治をおこなったことで知られる。キリスト教の教会建築の模様にも、シェンヌの葉はさかんに装飾模様として描かれている。日本の仏教建築の模様には葡萄文様がよく用いられていて、仏教が葡萄

のさかんに栽培されていた中央アジアを経てきたことを示すが、キリスト教会の装飾文様にはシェンヌの葉がさかんに用いられているのである。ミラノ大聖堂の地下墓所（クリプト）の装飾は壁床ともシェンヌの葉であることに驚いた。イタリアだからオリーブの葉が優越するのではないかと想像していたが、シェンヌ文様であった。実際イタリアとアドリア海を隔ててあるクロアチアには今でも広大なシェンヌの森が広がっている。キリスト教会で描かれるのは基本的にキリストの十字架にいたる物語か聖母マリア像、それに使徒の姿であるが、装飾としてシェンヌというキリスト教以前の信仰にかかわる文様がキリスト教会のなかにめだたないように紛れ込んでいるのである。

このようなシェンヌを中心とする落葉樹の森が、ヨーロッパ人にとっては野生の「自然状態」のイメージであったようだ。それ故、文化以前の野生の自然状態をフランス語でソヴァージュ (sauvage)、英語でサヴェイジ (savage) というが、この語は森を意味するラテン語シルヴァ (silva) に由来する。レヴィ・ストロースの有名な『野生の思考』の「野生」もこのソヴァージュである。だから、『野生の思考』は『森の思考』と訳しても差し支えない。

Silva (森) が野生の代名詞であることを示めすいい例は別にもある。シルヴィー・ヴァルタンという女優の名前を知る人は少ないと思うが、1960年代の終わり頃、『太陽の下の18歳』という映画の主演を演じ、ツイストをはやらせた女優が、シルヴィー・ヴァルタンである。社交ダンスか田舎くさいフォークダンスかという時代に、細実の身体に白いパンタロンという姿で、ツイストという現代風ダンスをさっそうと踊ってみせたのが、シルヴィー・ヴァルタンである。シルヴィーという名は、当然芸名である。なぜならキリスト教徒であるヨーロッパ人の名前はキリスト教の聖者の名前から取られるのが普通だからである。ユダヤ人なら旧約聖書ゆかりの人物の名前がつけられる。しかしシルヴィーは、キリスト教の聖者の名前でも旧約の人物の名前でもない。その意味するところは「森」であり、シルヴィーという名には野生の森の妖精といでもいうべき響きがあるのであり、ツイストをおどるシルヴィーの姿はヨーロッパ人には森の妖精のように映ったにちがいない。私は健康な現代女性のモデルはこのシルヴィー・ヴァルタンだと思っている。

その後、『ロッキー』や『ランボー』で、シルバスターというやはり森に由来する名を有した男性の野生派俳優、シルバスター・スタローンが登場しているが、この名前も当然役どころを意識した芸名であるだろう。

IV. ヨーロッパ森の破壊の歴史：森から牧場へ

上に見たようなヨーロッパ文化の原郷としての森の文化はしかしながら、その歴史時代を通じて急速に消失してゆく。この森の破壊者はまず2000年前頃ヨーロッパに鉄器の文化をもたらしたケルト人である。彼らの時代、森は半分に減少した。しかしカエサルがガリアの地の征服を企てた時、かれらの多くはまだ森の中に暮らし、この森がガリア征服の大きな障害となった。カエサルのガリア征服は紀元前58年、ケルトの若き勇将ヴェルサンジェネトリックスとのアレジアの戦いで終わるが、このアレジアがあったとされるブルゴーニュとパリ盆地地帯は低い山並みというより丘が波打つ地域であり、村や町もほとんど見当たらず、丘はいまでもシェンヌの森に蔽われていて、そ

森の文化としてのヨーロッパ

こかしこにケルトの残党が今も隠れていそうなふんいきがある。

この森が、ゲルマン人の支配した中世において、4分の1にまで減少する。特に、12 - 13世紀の大開墾時代は森林破壊のクライマックスであったが、これにより中世社会は成熟期を迎えるに至る。森を破壊したのはただし、斧だけではなかった。先に見たように森の中での家畜の「林内飼育」も、きわめて大きな要因だった。家畜は森の若木や草を食み、森の再生力を妨げてしまうからである。特にヤギは、若木を根絶やしにするまで食べるので有名であった。そのため林内放牧の禁止が中世にはじめるが、林内放牧は終わらなかった。森の中では、夏季にはウシやウマの放牧、冬季にはブタの放牧がおこなわれていた。これはブタが主に秋冬に実る木の実をたべたからである。ウシやウマは木の実を食べると腹を壊すといまでも言われ、ウシやウマは草を主に食べていた。1739年の資料であるが、ドイツのある4500ヘクタールの森では、ブタ795頭、ウマ154頭、ウシ1173頭、羊3146頭が飼育されていたという（ハーゼル1996：74）。

こうした林内飼育は森を次第に牧草地にかえてゆく。イギリスでは、16世紀頃から、農地や森を羊の牧草地に変える囲い込み運動がはじまったことが知られているが、牧草地形成の運動はそれ以前からゆくりとヨーロッパ各地で始まっていたのである。

牧草地といえば、和辻哲郎が『風土』で世界の風土を「モンスーン」（アジア）と「牧場」（ヨーロッパ）、それに「沙漠」（中東）に分類したことが想起される。この分類は世界の気候風土を、乾燥地域と湿潤な森林地域に分けて考えようとしている筆者にとって、大変興味深い分類である。和辻はヨーロッパの風土をおおまかに「牧場」としているが、丁寧に読むと、かれが「牧場」の典型としているのはギリシャやローマの地中海世界だということがわかる。西ヨーロッパ、特にドイツなどはモンスーンの森の風土にかぎりなく近い世界として捉えている。西ヨーロッパは森がいわば「牧場化」した世界である。言いかえるとヨーロッパには元来今見るような牧場は存在しなかった。これまでも引用をしてきた『森が語るドイツの歴史』に著者カール・ハーゼルによると、ドイツに牧場が成立するのは18世紀である。イギリスでは「囲い込み運動」がおこる16世紀のようである（川崎1987）。フランスではカマンベール・チーズで有名なノルマンディー地方を中心に比較的早くから牧場が登場しているが、ノルマンディーと並ぶ酪農地帯ブルターニュでは、19世紀後半まで、牧場形式の牧畜はみられなかった。ランドと呼ばれる荒蕪地や自然草原あるいは農地の傍らなどで少数飼育されていたのである。19世紀から20世紀にかけてのブルターニュの農牧業の大改革が牧場形成であったことを、実は今、私はブルターニュのある寒村の歴史を調べるなかで知りつつある。

牧場形成の問題はアフロ・ユーラシア大陸中央部によこたわる乾燥・半乾燥地帯でも目下大問題となっている。この地域では遊牧形式による家畜飼育が大規模に行われてきた。しかし遊牧は広大な土地をかなり無駄に使っているように見えるらしく、牧場形成による牧畜の近代化があちこちで試みられるようになっているのである。そのために様々な問題が生じているが、その当否はともかく、牧場というのが家畜飼育の手段としてもっとも進んだ飼育方法かのごとく考えられていることは問題である。牧場が形成されるまでには、ヨーロッパでも長い歴史がある。そのうえに、牧場というのは、自然の牧草の少ない湿潤な森林地域で家畜飼育を行う場合の方法であった。自然の牧草

(イネ科植物)が豊富にある乾燥地・半乾燥地でおこなうべき家畜飼育の方法ではないのではないかと考えている。

V. 森の破壊とヨーロッパの世界進出

森の破壊は、ヨーロッパの世界進出、すなわち大航海時代とともに始まる世界への航海と移民そして植民地化の問題とも深く結びついていた。

その理由の一つは、船の建造の問題である。船建造には膨大な木材を必要とする。船の建材としてかつて有名だったのは、レバノン杉である。地中海をまたにかけて活躍したフェニキア商人は、レヴァノンの地がその根拠地であった。そのためレヴァノン杉は伐採し尽くされた。北方スカンジナビア地域のノルマン人がイギリス、フランスに進出することができたのも、豊富な木材によってすぐれた船を多数建造できたからである。大航海時代にも、船建造のために、かなりの森が切り倒された。イギリスがスペインの無敵艦隊を破ったビクトリア朝時代、そのためにイギリスの木はほとんど切り倒された。17世紀のある英国詩人はつぎのように歌ったという(川崎 1987: 188)。

英国民は世界の偉大な荒野である大洋の主。
森をことごとく送り出して海を支配する。

またフランスの大航海時代の根拠地となったのは、大西洋に突き出したブルターニュ半島で、フランス船の建造はほとんどがブルターニュ半島で行われた。それはこの半島が森林に恵まれていたからであったが、そのため、フランス国王は森林への地域住民の出入りを禁止するなど、船建材の木材確保に強権力をふるわなければならなかった。そしてその結果、今、ブルターニュから森はほとんど消えている。

森の破壊がヨーロッパの世界進出に関係したもうひとつの理由は、フロンティアの消失だ。森とは人類にとってのフロンティアだからである。人類が人類としての初期中期の発展を遂げたのは乾燥地域である。乾燥地域はまずなによりも野生の草食哺乳類が豊富だ。人間は長い間狩猟採集の生活を行ってきたが、乾燥地域には狩猟採集生活にはうってつけの土地であった。そもそも人間が二足歩行するようになったのは森に棲む類人猿がなにもつかまえるものがない草原に進出したからだ。人間はついでその草食動物のうちの一部を家畜化し牧畜をはじめることができた。農業も、乾燥地には種子植物が多く、これを栽培植物化することにより穀物や豆の農業をはじめることができた。乾燥地ではなによりも、湿润森林地域のように人間の生活空間を築きあげるために森を伐採する必要がない。森を伐採できるようになるのは鉄器の発明がってからだ。また、乾燥地では、家畜化した大型動物(ラクダやウマ)を使って、長距離の交易活動もまた軍事活動もなしえたのである。こうした意味でわたしは乾燥地は人類文明の先進地域と考えている(嶋田 2005)。

人類はその乾燥地から湿润な森林地域への侵入をすこしづつ試み始めた。人類の異動の歴史を概観してみると、ほとんど、乾燥地域から、湿润な森林地域への移動だ。ケルト民族やゲルマン民族

森の文化としてのヨーロッパ

も、言語的にはインド・ゲルマン語族に属していることからわかるように、元来は内陸ユーラシアの乾燥地域に分布していた可能性が大きいのである。

そのケルト民族やゲルマン民族はヨーロッパの森を食いつぶしながらその勢力を広げてきた。フランスの人類学者ジョルジュ・コンドミナスに『われわれは森を食った』という名著がある（邦語訳は「森を食べる人々」）。これは東南アジアの森林破壊を論じた著書であるが、同じ題名の著書はヨーロッパについても書ける。ハーゼルの『森が語るドイツの歴史』や川崎寿彦の『森のイングランド』が語るのはこの歴史である。幸い日本は山岳地形が多く、山岳地の森は食えなかったが、人類の歴史は総じて森を食い尽くす歴史だといってもよいだろう。その速度に、アジアもヨーロッパもアフリカも変わりはないと見ているが、いかんせん、降雨量の比較的少ないヨーロッパの森は図1にみるように、いささか頼りない浅い森であった。つまり、16世紀以降ヨーロッパが世界進出する時代に、ヨーロッパの森はあらかじめ食い尽くされてしまった。つまりもはや開拓すべきフロンティアはなくなってしまったのである。そのことを端的に象徴するのが土地から多数の農民を追い出したイギリスの囲い込み運動だ。しかし大陸でも、森が過放牧によって消滅しかかるなど、土地不足は中世末期にすでに深刻な問題になっていた。

つまり農村部の人口は飽和状態に達していた。この人口圧力は、一方でヨーロッパに都市を生み出す要因になったのであるが、他方では、新たなフロンティアを求める運動になった、と考えられるのである。ヨーロッパの海外移民の最大排出地はイギリスとアイルランド、フランスの海外移民の最大輩出地はブルターニュであるが、ともに本来は森が最も豊かであった地にかかわらず、森がほとんど消滅した地域であることは偶然ではないだろう。

同じ論理にしたがうなら、16世紀には東南アジアにまで海洋進出していた日本が17世紀はじめ突然鎖国をし得た理由は、逆に、日本にはまだかなりの森林が未墾の地として、つまりは内的なフロンティアとして残っていたことに求められることになるのではないだろうか。

おわりに

ヨーロッパとは何かという問題への試論を試みた。ヨーロッパとは何かという問題は、比較の視点をどこに取るかで変わってくる。私はアフリカの乾燥地域での研究を長らく続けてきたから、乾燥地域の視点から、ヨーロッパを森の文化としてとらえることができると考えた。しかし、森の文化も多様である。同じ森の文化の視点から、ヨーロッパの森の文化、アジア・モンスーンの森の文化、アフリカの森の文化の違いも考察する必要がある。頁数の関係で詳しく述べられなかったが、ヨーロッパの森の文化は、森の文化としてかなり特殊だと考えている。その最大の理由は、ヨーロッパの森の文化が、落葉樹林を中心とする森の文化だ、という点にある。常緑の森に比べて、落葉樹中心の森は、木の実をたくさん実らす恐ろしく豊かな森だからである。ヨーロッパの森が寒冷地の森で、そのため蚊やハエその他家畜の病気をひきおこす害虫や病原菌がないことも重要である。そのためヨーロッパの森では、豊富な野生動物に恵まれ家畜飼育も可能であった。しかしアフリカの熱帯雨林に草食哺乳類はわずかしかないし、家畜飼育もヤギが小規模飼育されるだけでほ

とんど不可能であった。この点日本の森林文化も例外的かもしれない。落葉樹中心の森林があり、また乾燥した草原の文化であるウマの文化がはやくから入り込んでいるからである。こうした点を考慮しながら、森林文化の比較をさらに詳しくこころみるならば、ヨーロッパや日本の文化と歴史形成の謎がさまざま明らかになるにちがいない。

文 献

- Cassages-Brouquet, S. et ChambarlhacmV. 1995, *L'Âge d'or de la Forêt*, Rodez : Editions du Rouberrique。
川崎寿彦 1987『森のイングランド』平凡社
コンドミナス、G. 1983『森を食べる人々』橋本和也・青木寿江訳、紀伊国屋書店
嶋田義仁 2005「乾燥地域における人間生活の基本構造」『地球環境』
ハーゼル、カール 1996『森が語るドイツの歴史』山縣光晶訳、築地書館
レヴィ・ストロース、Cl. 1976『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房
ルッソー、J.-J. 1972『人間不平等起源論』本田喜代治・平岡昇訳、岩波書店
和辻哲郎 1966『風土』岩波書店